

卷頭言

ジオパークと「現代イワクラ」

会長 渡辺豊和

今度の上毛イワクラツアード妙義山の洞門は行つたのか、行つていなかつたのか、ちょっととしたことでカメラ持参できなかつたこともあり、残念ながら記憶がないのだが、須田郡司の写真で知つてしまつた気になつてゐる。

洞門は自然にできた岩のアーチだが、ピラミッド状の姿形を示す丘や山も自然の造形というのが科学的常識であるのは承知しているつもりだ。ジオパークはそんな自然の造形を観光対象にした概念らしい。うかつなことに知らなかつた。私は建築家だから興味はどうしても人工物に集まる。鍾乳洞はどうみても自然の造形

にジオパークを考え出す根源に触れているに違いない。
といつても氏が奇岩などを觀光の対象などと考えているということではないだろう。極めて純粹な興味に違ない。地質学・鉱物学者だから、研究対象にならう。

だし、私もそう思つてみているが、何時しかアントニオ・ガウディの建築と比較している。こつちのほうガウディよりすごい。あたりまえかもしない。自然の造形が人工造形を上回るのはまず間違いない。

確かに加藤氏がいうように私たちは石に人間や象など、様々な形を仮託する。「獅子岩」といった類だが、氏はこれを日本人特有の感性だといつてた。そうかもしれない。そういえばガウディ建築のモデルといわれるバルセロナ郊外のモンセラの奇岩にそんな名称はつけられていなかつた。

会員が人工造形と思つている様々なイワクラをとともに自然造形と断を下していた。というよりも氏にすれば人工など考えられないということがだつた。

ただし石がみせるパワーには充分な感性を示してたし、それより自然がみせる石や岩の造形に魅せられるのがよく伝わってきた。まさ

など具象的な形態を思わせる造形が多いから、ひょっとしたら、彼は私たち同様奇岩に人間、動物、樹木などの具象形態をみて、それを建築空間に転移したのかもしれない。

ただ日本人は岩や石に具象形態をイメージできるのに、どうして石造建築を創出できなかつたのか、不思議だ。日本に石造建築が根付きはしなかつたが、まるでなかつたというわけではない。中、近世城郭石垣の懸垂曲線美は日本独特で、こんな造形は世界にほかに類型はない。

ところが石垣は何処までも石垣であつて、土留めが役割であり、中が空洞であるべき建築の壁面ではない。だから石垣の曲線美を実現させた技術をいくら称揚したところで、建築空間に到りつくわけではない。

私の目には人間、だつたり、ライオンだつたり、樹木にみえるのだが、そんな説明はついぞ聞かなかつた。また本で読んだこともない。それでもガウディ建築にはトウキビや騎士やはり私には人の手が加わっている

とみえる。勿論そうでないものもあつたにしてもだ。

弁慶の手別石などは人工ではないだろうが、巨石を積んだとみえる産泰神社のイワクラなどは自然造形とはいえないのではないか。加藤氏は否定されるだろうが。

今度のツアーに参加していたが、宮城県の山田政博（会員敬称略）から頼まれて「現代イワクラ」の計画をし、それを彼が自分の山で構築はじめている。彼は何代目かの石屋さんだ。広大な石切り場をもつて石の採取、加工、仕事をする石材会社の経営者だ。

自分の山から高さ五メートルの巨石が二、三メートルが五本出土した。高さ五メートルの巨石などそう滅多に出土するものではないらしい。それはそうだろう。この日本にそんな立石（メンヘル）をみたためしがないからだ。有名なフランスのカルナック直列石にもそんなものはほとんどなかつた。

売れば高値がつくはずなのに、その巨石群を自分好みの造形物として使用したい、何か面白い計画ができるないか、というのが私への相談だった。

私が考えたことは簡単にいえばこうだ。高さ五メートルの巨石を対にして南北方向に立て、それに直交して東西に立て並べる。ただし五メートルの対は長径一〇メートル、短径一八メートルの橢円平面石垣で囲むが、東西に門をつくる。その門の外に一本ずつ三メートルの石が直列するのだ。

春分と秋分の日、日の出、日没の水平光を受けて一本の三メートル巨石が影を東西に延ばし、はるか先に対面する二本の三メートル巨石をかげさせる。この影は門と南北対の五メートル巨石の隙間、二メートルをすり抜けるのだ。

山田はその計画に沿って「現代イ

今度のイワクラ・サミット後、彼の山にいって現場をみせてもらった。五メートルの対の巨石を立ててあった。

自然石だから、巨石の形は任意だ。少し太った頑丈な男、それに比べてやや痩せ目で、こころもち乳房が胸に盛り上がる女。そう思える二つの巨石が向き合った様は男女のペアにみえる。自然石だが、どんな優秀な彫刻家の作品をもはるかに凌駕している。これをみた瞬間の直感だ。自然の造形はすごい。しかしこれを立ち上げ、ペアに並べたのは人間だ。

ここに人間の造形意識が明確に立ち働いている。

イワクラに私たちが感動するのは自然石を巧みに配列する人間の造形意識をそこにみるからに違いない。古代の人々は自然の奇怪な形の巨石に畏怖しただろう。また自然の造形に感動もしたに違いない。しかし彼らはそのまま鑑賞することはしなかつたのだ。これらの巨石たちを積ん

だり、立てて環状に配列したりして手を加え、自然と人工造形の対立緊張を産みだしたのだ。

「現代イワクラ」に手を染めてみ

て実感したことだ。勿論山田政博もそうだろう。ともあれ宮城県の山中に少しづつこれが形をなしていくだろ。古代人がそうしたように。

了